鹿児島県立鶴丸高等学校広報紙

好学愛知
自律敬愛
質実剛健

鶴信

第39号　H21．2．27

鹿児島県立鶴丸高等学校
〒890-8502　鹿児島市薬師二丁目1番1号
TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

3月の行事予定

	3　月		
1	(日)	スタディーサポート(1年)	
2	月	**第６０回卒業式**	
3	火		
4	水	入学学力検査場設営	
5	木	**入学学力検査(1日目)**	生徒自宅
6	金	**入学学力検査(2日目)**	
7	(土)		
8	(日)	国公立大学中期日程試験(3/8～)	
9	月		学習期間
10	火	学校安全の日	
11	水	**火の授業**	
12	木	国公立大学後期日程試験(3/12～) 第12回職員会議(1～4の授業)	
13	金	合格者発表　　学年会	
14	(土)		
15	(日)		
16	月	全校朝会 合格者集合	
17	火		
18	水	防犯教室	
19	木	第13回職員会議(4～7の授業)	
20	(金)	春分の日	
21	(土)		
22	(日)		
23	月	学年朝会 職員研修(進路)	
24	火		
25	水	**終業式** 大掃除	
26	木	第14回職員会議	
27	金	**離任式** 合格体験を聞く会	
28	(土)		
29	(日)		
30	月		
31	火		

伝統に連なる者達へ

教頭　岡留秀一

ＮＨＫの大河ドラマ「篤姫」が好評であった。視聴率や世間での取り上げられ方を見ると人気があったと言ってよいだろう。歴史的な観点から見ると、篤姫が生きた時代に、身分の違う於一（おかつ）、尚五郎、吉之助、正助の四人が直に会っていたかは疑問であるが、「篤姫」を見ていくことで、高校時代に習った幕末から明治への流れがより明確になることは楽しみの一つでもあった。

尚古集成館副館長の松尾千歳氏の講演を聞く機会があった。講演の冒頭で「西郷とか大久保の活躍はよく語られるが、その母胎となった薩摩のすごさが伝わっていない」と話された。

講演で特に興味を引かれたのは、薩摩藩が作った国絵図の話である。国絵図とは、江戸幕府が主要大名に命じて調進させた国ごとの地図のことである。薩摩藩が担当した国絵図の精度は、他藩が作成したものと違って極めて高く、薩摩藩が高度な測量技術を持っていたことを示しているということであった。（国絵図は、国立公文書館ホームページから見ることができるので、是非見てほしい）そして、様々な文化財が語りかけてくる鹿児島の歴史は、開放的で文化水準・技術水準ともに高いものであるということであった。

講演の最後に、今から約百五十年前の幕末、近代国家の基礎を築くことに貢献した薩摩の先人達が、京都や江戸に行ってもまったく相手の文化に流されなかったのは、自分が何者かをきちんと把握していたからだろうと話された。

鹿児島には郷中教育という薩摩藩の伝統的な教育があった。幕末に活躍した先人達は、元来人物的にも優れていたのかもしれないが、彼らの在り方生き方の根幹は郷中教育を機軸とした薩摩文化の環境の中ではぐくまれたのではないだろうか。だから、どのような状況にあっても自分が成すべき事がぶれなかったのだろう。

鶴丸高校にも誇るべき百十四年の長い歴史と伝統があり、多くの先輩達が長い時間をかけて作り上げてきた鶴丸文化がある。今と幕末期を比べること自体ナンセンスと思うが、当時とは比較にならないほど社会や経済、文化等々グローバル化は進展している。今後ますます地球規模での交流が進んでいくだろう。そして地球社会の一員として活躍する人々には、活躍の舞台にふさわしい教養と専門的知識が求められるだろう。君たちも、先人達が薩摩で教養や知識を高めてきたように、鶴丸の環境の中で己を磨いていってほしい。また、三年生は、鶴丸で過ごしたことを自信として新たな環境でも己を磨いてほしい。

「篤姫」の最終回に、天璋院が一緒に時を過ごした身近な人や、一緒に喜びを分かち合った家族への感謝をつぶやく場面がある。合格体験記録集「For Others」の中にも、家族や先生、友人への感謝の言葉が異口同音に述べられている。どのような時代であっても、自分にかかわる人々への感謝の気持ちを忘れてはなるまい。三月二日、第六十回卒業式を迎える。

親思う心にまさる親心
今日のおとづれ何と聞くらん

校内弁論大会

2月16日の7限目に、平成20年度の校内弁論大会が行われた。クラス審査、学年審査を経て、合計6名の弁士が選出された。

15Ｒの蓑田詩織さんは「小さな命の輝き」と題して命の尊さを、25Ｒの伊地知悟くんは「仮面と『うーん何となく』」というタイトルで人間性とは何かを自問自答した。12Ｒの松元綾子さんは「話そうよ」を通し、日常の中から幸せを見つけるヒントを私たちに示してくれた。

優秀賞には22Ｒの萩原由香さんの「故郷」、24Ｒの前野孝明くんの「自分の自分による、自分のための授業の生かし方」が選ばれた。萩原さんは、鹿児島のシンボル桜島を例にとり故郷は愛すべき特別な場所であると謳い、前野くんは授業の積極的な受け方を独特な口調で語り上げた。どちらの作品も彼らのオリジナリティがあふれ出たものであった。

今年度の最優秀賞には、17Ｒの田中千裕さんの「風のうた」が選ばれた。体の不自由さを不便なものとして捉えず、一つの個性として前向きに考えるその姿勢に聴衆は共感した。

「風のうた」を筆頭に今年度の弁論は、例年以上に物事の本質にまで掘り下げていく姿勢が見られた。さらには、人生において大切なことは目を見張るような出来事においてでなく、身近なことの中に存在することを我々に示してくれたことも大きな特徴だと言える。今回の弁論大会を通して学んだことを、是非とも今後の人生に生かしてもらいたい。

一学年進路講演会

1月28日（水）、河合塾の別府正彦先生を講師にお招きして、「現役合格の為に何を為すべきか。」という演題で1学年進路講演会が行われた。志望校に現役合格するためには「①自分が満足する学習時間を生活の中で習慣化すること。②志望校を決めること。③大学や入試の情報を自分から積極的に取りにいくこと。④勉強するうえで、理屈をわかって記憶をすること。⑤精神的に『大人』になること。」という五項目があるということを述べられた。特に⑤については、「大学入試は、大人になる通過点です。大人とは『やりたいことをやること』より『やらないといけないことをやる』ということが優先できる人です。受験勉強するのは君たちです。自分自身です。そして普段の勉強・生活がすべて受験につながっているということです。」と、「大人」になることの必要性を熱く語ってくださった。生徒からは「今日の講演は本当に現実を見せつけられた気がした。自分の夢の実現はとても難しいもので、かなりの努力を要するのに行動できていなかったのではないか。『行動しなくてはいけない！』という別府先生のお言葉にシンプルながら強い衝撃を受けた。」という感想が聞かれ、1学年のこの時期に自分を省みて2学年へとつなげる良い機会となったようだ。

二学年進路講演会

2月6日(金)、駿台予備学校の吉田直史先生を講師にお招きして「夢を掴め！～難関大を目指して～」という演題で2学年の進路講演会が行なわれた。

大学入学試験を一年後に控えた2年生に、「スタートは今しかない」ということや「真剣に取り組んだ現役生は驚異的な成績の伸び率を示す」ことなどを、多くの受験生を指導してこられた豊富な経験からお話くださった。

講演を聴いた生徒達からは「難関大学に合格する人は天才型ではなく、大半が基礎力のしっかり固まった人であることを知り基礎の大切さに気づいた」という意見や、「『最後まで学校の授業がど真ん中だ』という言葉に、自分自身を振り返ってどきっとした」「『謙虚であり、貪欲であれ』という言葉から、難関大学に合格する人は人間としても立派であるのだと痛感した。これからは学力はもちろんのこと、自分の内面や考え方も同時に磨いていこうと思う」「規則正しい生活のサイクルを早く完成させなくてはならないと感じた」といった、今までの生活を振り返り将来を見据えた前向きな感想が多く聞かれた。勝負の一年、「一年後の別人になった自分」を想像しながら残り少ない高校生活を送ってほしい。

三年生二次試験始まる

2月25日を幕開きに国公立大学二次入学試験が始まった。

桜の花が咲き始める頃3年生の笑顔が見られることを祈って、最後まで応援したい。